

エプーリスの病理学的検討

第1報 症例の概要

福田容子 戸塚盛雄
武田泰典* 鈴木鍾美*

岩手医科大学歯学部歯科予診室 (主任: 戸塚盛雄教授)

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座* (主任: 鈴木鍾美教授)

[受付: 1985年9月13日]

抄録: 筆者らはエプーリスの病理学的取り扱いをいかにするかを目的として種々の検討を加えているが、今回は症例193例の概要を報告した。性比は男性64例, 女性128例, 不明1例で約1:2と女性に多かった。病理学的分類は石川の分類に準じた。その内訳は線維性エプーリス70例, 骨形成性エプーリス55例, 肉芽腫性エプーリス25例, 末梢血管拡張性エプーリス16例, 血管腫性エプーリス14例, 線維腫性エプーリス4例, 先天性エプーリス3例, 不明6例であった。腫瘍の大きさは桜実大までのものが大半を占めていた。発現部位は上顎前歯部が最も多かった。発症年齢は20~50歳代に好発しており, これらの年代で性差はとくに著明で, 女性に多く, なかでも20歳代で女性の占める割合が高かった。

各組織型ごとに発症年齢をみると線維性エプーリスは40, 50歳代に多く, 骨形成性エプーリスは20歳代と50歳代に多かった。血管腫性エプーリスは20, 30歳代に発症する割合が高かった。

Key words: epulis, chinal analysis, histopathological classification

I 緒 言

エプーリスは日常の歯科臨床において比較的良好に観察される口腔領域の疾患のひとつで, 古くより歯肉部に生じた限局性腫瘍の総括的臨床名として用いられてきた。しかし, その定義と分類に関しては種々の見解があり, 未だ統一をみていない。本邦においてはエプーリスという用語は習慣的に臨床および病理組織学的診断名として広く用いられている。しかし欧米においては, 近年エプーリスという用語は病変の本態を表わしていないことより, 次第に用いられなくなりつつある¹⁻⁴⁾。エプーリスの成り立ちに関しては多くは炎症性ないし反応性の増殖物であるとされているが, 中には形態学的にも真の腫瘍と区別が困難なものもある⁵⁾。また, エプーリ

スとされている病変は多彩な組織像を呈することより, 種々な組織学的分類が試みられている。筆者らはエプーリスの病理学的取り扱い方をいかにするかを目的として, 種々の検討を加えているが, 今回は症例の概要について報告する。

II 材料と方法

検索材料は, 1967年から1984年6月までの過去17.5年間に本学口腔病理学講座において取り扱った生検および手術材料のうち, エプーリスと診断された193例である。病理組織学的分類は石川の分類⁵⁾に準じて行なった。これらの症例についてその病理組織診断と性別, 大きさ, 発現部位, 年代別症例数について検討した。

Pathological study of the epulis. Part 1: An analysis of 193 cases.

Yohko FUKUTA, Morio TOTSUKA, Yasunori TAKEDA* and Atsumi SUZUKI*

(Departments of Oral Diagnosis, and Oral Pathology*, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 020)

岩手県盛岡市中央通1-3-27 (〒020)

* 岩手県盛岡市内丸19-1 (〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 10: 136-141, 1985

III 結 果

エプーリス193例は、過去17.5年間口腔病理学講座において取り扱った生検および手術材料6,851例の2.8%に相当した。

性別では男性64例、女性128例、不明1例で男女比は約1:2と女性に多くみられた。

1. エプーリスの組織型と性別 (表1)

症例の内訳は、線維性エプーリスが男26例、女44例の計70例、骨形成性エプーリスが男16例、女39例の計55例、肉芽腫性エプーリスが男9例、女16例の計25例、末梢血管拡張性エプーリスが男5例、女11例の計16例、血管腫性エプーリスが男2例、女12例の計14例、線維腫性エプーリスが男3例、女1例の計4例、先天性エプーリスが男1例、女1例、性別不明1例の計3例、診断名不明が6例であった。巨細胞エプーリス

は検索材料にはなかった。

線維性エプーリス、骨形成性エプーリス、肉芽腫性エプーリス、末梢血管拡張性エプーリスの各型とも男女比は約1:2で女性に多かった。また、血管腫性エプーリスも女性に多くみられたが、その男女比は1:6ととくに女性に好発していた。

2. 各組織型からみたエプーリスの大きさ (表2)

大きさ不明の47例を除いて大豆大までのものが85例と約半数を占め、桜実大までの大きさのものは138例で症例の大部分を占めていた。

各組織型ごとに大きさをみた場合にも大豆大、桜実大までの大きさのものが多かった。鶏卵大以上の巨大なエプーリスは線維性エプーリスが1例、骨形成性エプーリスが2例であった。

表1 エプーリスの組織型と性別

組 織 型	男 性	女 性	不 明	計 (%)
線維性エプーリス	26	44		70 (36.3)
骨形成性エプーリス	16	39		55 (28.5)
肉芽腫性エプーリス	9	16		25 (13.0)
末梢血管拡張性エプーリス	5	11		16 (8.3)
血管腫性エプーリス	2	12		14 (7.3)
線維腫性エプーリス	3	1		4 (2.1)
先天性エプーリス*	1	1	1	3 (1.6)
不 明	2	4		6 (3.1)
計 (%)	64 (33.1)	128 (66.3)	1 (0.5)	193

*:先天性エプーリスは組織学的分類ではないが、一般に独立して扱われているために上記の如く扱った。

表2 組織型からみたエプーリスの大きさ

組 織 型	~大豆大	桜実大	鳩卵大	鶏卵大~	不 明
線維性エプーリス	32	16	2	1	19
骨形成性エプーリス	21	21	1	2	10
肉芽腫性エプーリス	13	5	1		6
末梢血管拡張性エプーリス	8	2	1		5
血管腫性エプーリス	7	5			2
線維腫性エプーリス	1	1			2
先天性エプーリス	1	1			1
不 明	2	2			2
計	85	53	5	3	47

3. 発現部位別症例数 (図1)

発現部位不明の25例を除いた168例についてその発現部位をみると上顎が90例、下顎が78例と上顎にやや多かった。上顎は前歯部52例、小白歯部21例、大白歯部17例、下顎は前歯部40例、小白歯部9例、大白歯部29例と前歯部に多くみられた。ただし、大白歯部では下顎の方に多く

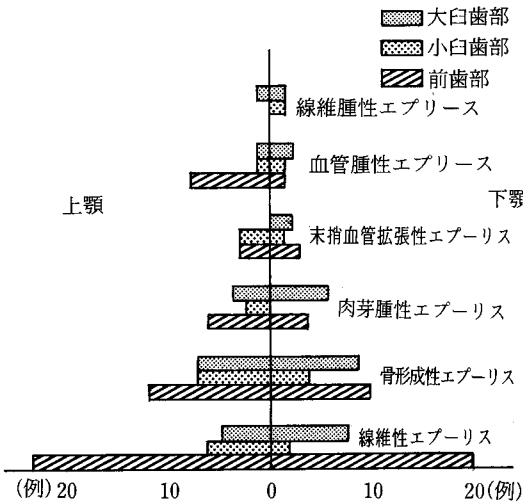


図1 発現部位別症例数

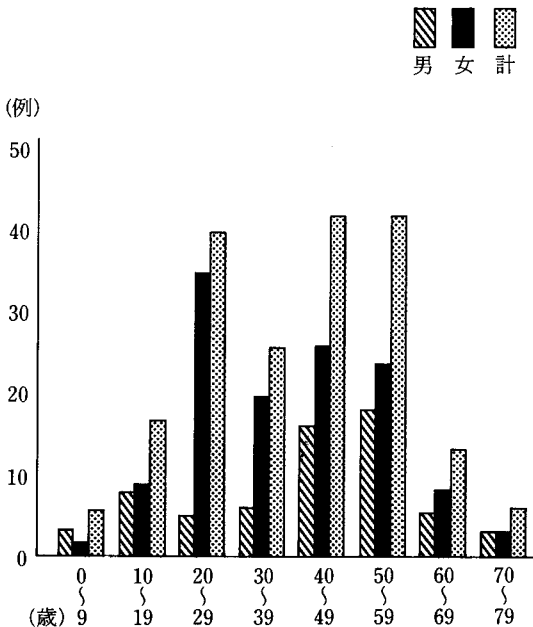


図2 エプーリスの年代別症例数(実数)

発現していた。

各組織型ごとに発現部位をみると、線維性エプーリスは上下顎前歯部に、血管腫性エプーリスは上顎前歯部に発現する割合が特に高かった。一方、骨形成性エプーリスは前歯部とともに小・大白歯部にも発現する割合が高かった。

4. 年代別症例数 (図2)

エプーリスの発症年齢は0歳から77歳までの各年齢層に及んでいた。症例は20歳代から50歳代にかけて多く、20歳未満と60歳以上の症例数は少なかった。特に10歳未満と70歳以上は少なく、各々6例のみであった。20~50歳代は性差が著明で女性に好発しており、特に20歳代、30歳代は女性が男性のそれぞれ7倍、3.3倍であった。

5. 組織型からみたエプーリスの年代別症例数

図3に示す如く、線維性エプーリスは40歳代、50歳代の症例数が多かった。骨形成性エプーリスは20歳代と50歳代に多く発症していた。各組織型の症例数を100パーセントとした百分率でみると、末梢血管拡張性エプーリスは40歳代に発症する割合が高かった。血管腫性エプーリスは20歳代、30歳代に発症する割合が高かった。

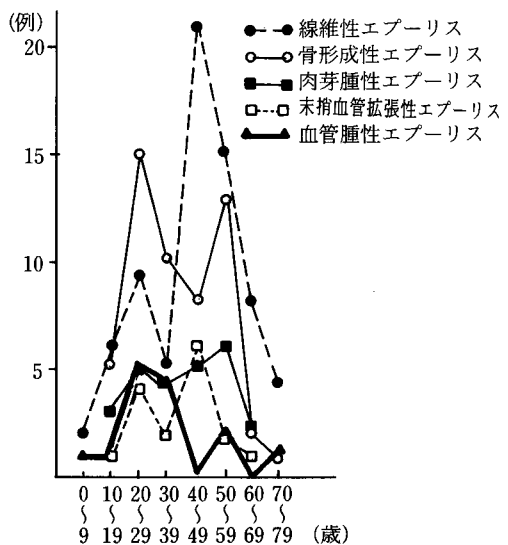


図3 組織型からみたエプーリスの年代別症例数(実数)

IV 考 察

エプーリスの分類と定義、およびその成り立ちについては古くより種々の見解があり、未だ統一をみていない。本邦においては、現在まで多数例の報告がいくつかみられている⁵⁻¹¹⁾。エプーリスとされているものは、おおむね歯肉に生じた限局性の炎症性あるいは反応性増殖物を示しているが、腫瘍性エプーリスの項目をもうけているものもある^{7,8)}。欧米においても歯肉の反応性増殖物について種々の研究がなされてきたが^{12,13)}、本邦の如き習慣的にほとんどの研究者がエプーリスという用語を用いているわけではない。したがって、本邦例と欧米例との比較検討が困難な状態である。また、欧米では巨細胞エプーリスがエプーリス全体の半数近くを占めるとされている¹²⁾が、本邦において巨細胞エプーリスの発現は稀である。これについては人種的な相違も示唆され、さらに詳細な検討が望まれる。

筆者らは、他報告との比較のため石川の分類⁵⁾に準じて分類を試み、病理組織型と性別、大きさ、発現部位、発症年齢等について検討を加えた。

なお、本邦でいういわゆる義歯性線維腫は、欧米では *epulis fissuratum*¹⁴⁾ と呼ばれエプーリスに含まれているが、発現部位のほとんどが歯肉頬移行部であり、本邦でいうエプーリスとは異なるため今回の検索からは除外した。

1. 組織学的分類別症例数

エプーリスの組織型別発現頻度は、従来の報告では報告者により分類の方法が多少異なるため一定していないが、線維性エプーリス、肉芽腫性エプーリスの発現数が多い点ではほぼ共通している。本検索においても、線維性エプーリスが最も多く70例で全体の36.3%を占めた。末梢血管拡張性エプーリスは16例であったが、末梢血管拡張性エプーリスは石川の分類⁵⁾では末梢血管拡張性線維性エプーリスとして線維性エプーリスの範疇に包含されている。したがって、筆者らの症例の末梢血管拡張性エプーリスを線

維性エプーリスの中に入めると線維性エプーリスは86例(44.6%)となる。筆者らの症例では肉芽腫性エプーリスな比較的少なく(25例, 13.0%)、それに対し骨形成性エプーリスがやや多く全体の1/4以上存在していた(55例, 28.5%)。石川は骨形成性エプーリスの中に真性腫瘍を包含させている⁵⁾。しかし、硬組織の存在するエプーリスを肉芽腫性あるいは線維性エプーリスの亜型とする考えもある^{6,11,15)}。硬組織形成のあるエプーリスの位置づけに関しては興味深い問題であるので、今後さらに検討を加えていく予定である。

2. 年齢、性別について

エプーリスが女性に多いという見解は多くの文献で一致するところで^{3-6,8-13)}、その性比は筆者らの結果と同様に女性が男性の約2倍という値に近い報告が多かった^{5,8-11,13)}。

年代別症例数をみると20歳代から50歳代にかけては症例数も多く、とくにこれらの年代での女性における発症頻度が高かった。なかでも20歳代で女性の占める割合が特に高く、男性の7倍であった。これは、好士⁸⁾、張⁹⁾の報告とほぼ一致している。

各組織型ごとに性差をみると、血管腫性エプーリスで女性が男性の6倍の発現頻度(男2例, 女12例)であった。

各組織型ごとの年代別症例数は、線維性エプーリスは40、50歳代に多く発症しており、骨形成性エプーリスは20歳代と50歳代に2つのピークがみられた。従来の報告^{3,4,12)}では線維性エプーリスは比較的高齢者、骨形成性エプーリスは比較的若年者にみられる傾向があるが、分類基準が必ずしも同じでないため一定しない。また、血管腫性エプーリスは20歳代、30歳代に発症する割合が高かった。前述の如く血管腫性エプーリスの大部分は女性に発症していたが、これら女性例の血管腫性エプーリス12例中9例は妊娠中に発症したものであった。このことは、エプーリスは古くより女性ホルモンとの関係が示唆されてきたが、それを裏づける所見と思われた。

3. エプーリスの大きさと発現部位について

各組織型ごとに腫瘤の大きさを分類したが、従来の報告どおり桜実大までの大きさのものが症例の大部分を占め、組織型ごとの差は顕著ではなかった。鶏卵大以上の巨大なエプーリスは線維性エプーリスに1例、骨形成性エプーリスに2例みられたのみであった。

発現部位に関しては、上顎前歯部に最も多く発現するという報告が多い^{6-9,11)}。筆者らの症例においても上顎前歯部が最も多かったが、次いで下顎前歯部が多かった。組織型により発現部位に若干の相違がみられ、線維性エプーリスは上下顎前歯部に、血管腫性エプーリスは上顎前歯部に特に多かった。骨形成性エプーリスは、他組織型に比べ小・大臼歯部にも発症する割合が高かった。エプーリスの各組織型別における発現部位の相違は何に由来するかは明らかではないが、今後エプーリスと真性腫瘍の好発部位の比較検討も必要かと考える。

ま と め

1. エプーリス193例を石川の分類⁵⁾に準じて分

Abstract : Clinicopathological analysis was made of 193 cases of epulis examined in the Department of Oral Pathology, Iwate Medical University. They were classified histopathologically, and their location, sex predilection and age of patients were studied. The results were as follows :

1. They were classified histopathologically into 70 cases of epulis fibrosa, 55 cases of epulis osteoplastica, 25 cases of epulis granulomatosa, 16 cases of epulis teleangiectaticum, 14 cases of epulis hemangiomatosa, 4 cases of epulis fibromatosa, 3 cases of epulis congenita, and 6 cases with an unknown-histological diagnosis. No case of giant cell epulis was found in the present series.
2. Epulis was much more common in females than in males, by a ratio of 2:1. Furthermore such sex predilection in cases of epulis was more evident in the third to the sixth decades of life.
3. Most of the cases of epulis hemangiomatosa were found in females.
4. Most of the lesions were less than cherry-sized, and had a tendency to occur at the anterior region of both the maxilla and mandible.
5. Each histological type of epulis had its favorite age.

文 献

- 1) Shafer, W.G., Hine, M.K. and Levy, B.M. : A Textbook of Oral Pathology, 4th ed., W.B. Saunders Co., Philadelphia, 141-146, 198-199, 1983.
- 2) Gardner, D.G. : The peripheral odontogenic fibroma : An attempt at clarification. *Oral Surg.* 54 : 40-48, 1982.

類し、症例の概要について報告した。

2. 組織学的分類の内訳は、線維性エプーリス70例(36.3%)、骨形成性エプーリス55例(28.5%)、肉芽腫性エプーリス25例(13.0%)、末梢血管拡張性エプーリス16例(8.3%)、血管腫性エプーリス14例(7.3%)、線維腫性エプーリス4例(2.1%)、先天性エプーリス3例(1.6%)、診断名不明6例であった。

3. 男性64例、女性128例、性別不明1例と女性が男性の約2倍の割合で発症していた。

4. 症例は20~50歳代に多く、とくに女性に好発してみられた。

5. 大きさは、不明の47例を除いて138例が桜実大までの大きさであった。

6. 発現部位は、上顎が下顎よりやや多く、上下顎とも前歯部に多く発現していた。

7. 各組織型からみた発症年齢は、線維性エプーリスは40歳代、50歳代に、骨形成性エプーリスは20歳代と50歳代に好発していた。血管腫性エプーリスは20、30歳代に発症する割合が高かった。

3) Eversole, L.R. and Rovin, S. : Reactive lesions of the gingiva, *J Oral Path* 1 : 30-38, 1972.

4) Görrel, G. and Lasso, Å : Histopathology of benign gingival fibroblastic lesions with special reference to odontogenic fibroma and recurrence rates, *Scand J Dent Res* 91 : 79-89, 1983.

5) 石川梧朗監修：口腔病理学II, 改訂版, 永末書店, 京都, 229-240, 1982.

- 6) 正木正：顎腫瘍の病理組織学的所見と其の臨床的意義（二），齒科臨床，10：1058~1088，1938.
- 7) 伊藤秀夫：齒齦腫の組織学的検討，癌，37：238-240，1943.
- 8) 好士和夫：エプーリス（歯肉腫）の臨床的ならびに組織学的研究，口病誌，22：1666-1682，1959.
- 9) 張丕明：本学における最近6年間のエプーリス患者の臨床統計的観察，齒学，58：212-221，1970.
- 10) 岩崎弘治，梶川幸良，大西真：エプーリス63症例の臨床的観察，日口外誌，22：332-337，1976.
- 11) 石田武，長谷川清，小川裕三，吉岡千尋，青葉考昭，八木俊雄：エプーリスの分類と自験例160例の集計観察，口科誌，30：14-23，1981.
- 12) Brown, G.N., Darlington, C.G. and Kupfer, S. R. : A clinicopathologic study of alveolar border epulis with special emphasis on benign giant-cell tumor, *Oral Surg* 9 : 765-775, 1956.
- 13) Bhaskar, S.N. and Jacoway, J.R. : Peripheral fibroma and peripheral fibroma with calcification : report of 376 cases. *JADA* 73 : 1312-1320, 1966.
- 14) Bhaskar, S.N. : Synopsis of Oral Pathology, 6th ed., Mosby Co., st. Louis, 485-532, 1981.
- 15) 松宮誠一，田熊庄三郎：図説 口腔病理学，第3版，医歯薬出版，487，1977.